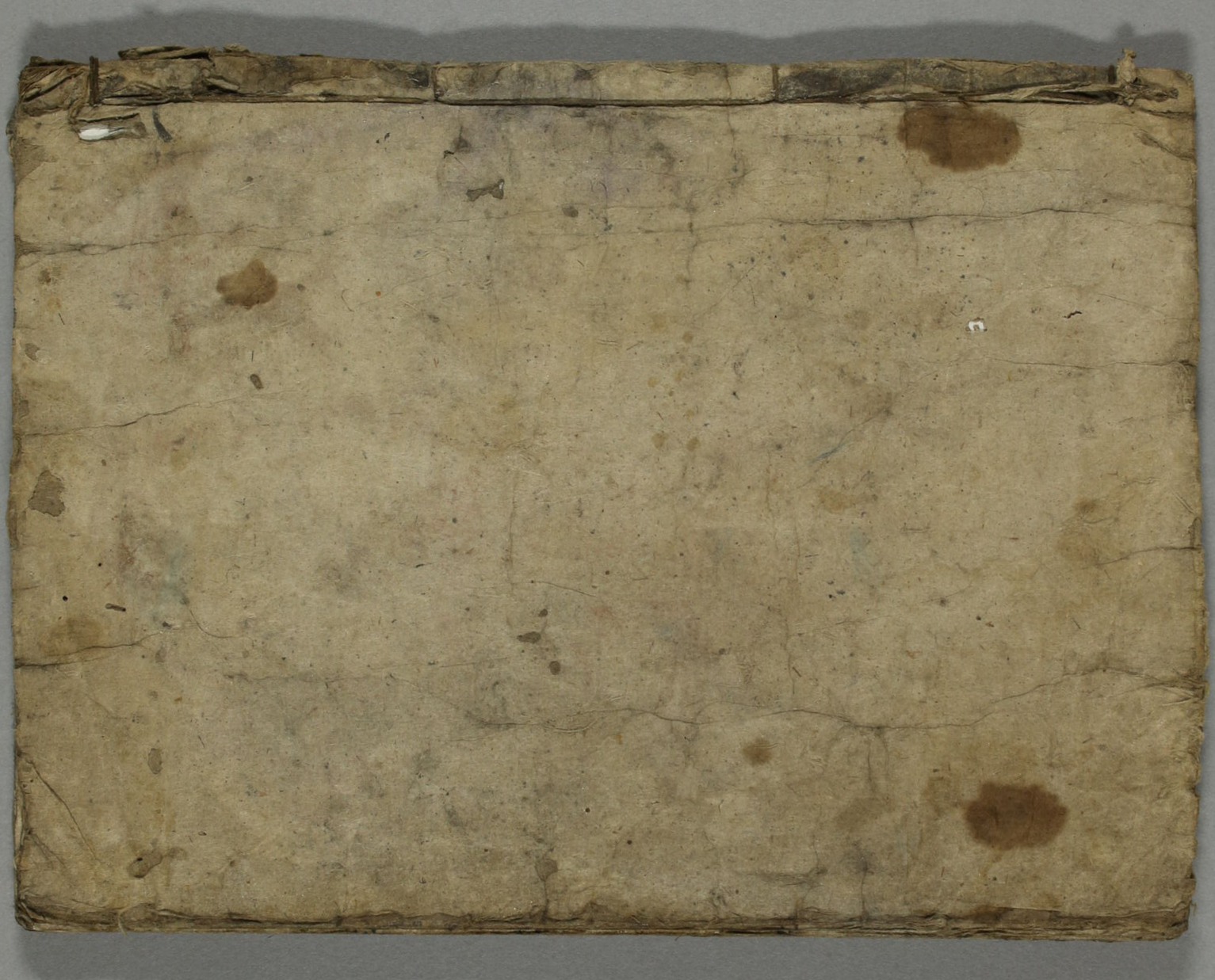

岩松村
小塚氏

性生要集巻之三

十

後花屋乃ゟ

それがきだくといふハ御花二つまゝ二つまゝハ地乃下ゟ百
ゆきゆんあるこゝしんまゝ王界なり二つまゝハ人天乃ゟ
そのさ海をなかるゝおかれハ今ことにかゝるとあるもへあるひ
ハ身れさけ一人あるひハ人乃ゟけのことくあるひハ子踈縁
あるひハ雪山乃ゟしあるひハかきまゝ獲身とゝつゝその
身ハさにさけまゝ人まゝるゝ二倍へかゝるもなく同
なしてまゝ足へハかゝへ乃ゟしかのほゝちくてまゝ身をかゝ
きこゝに花ハむりしあるゝとむさかりて人をゆきこゝり
ゝるものはむくひとうゝる又あるひハかきまゝ会社とゝ
つくまゝ身くゝまゝおしてゝけまゝ中旬なり一ひまむ
まゝつゝへかゝへてまれ出さんゝるとゝめてゝくゝる
たまゝるゝあるゝさるゝ花ハむりしあるひハ史まゝ

畜生

空
風
火
水
地

南無阿彌陀佛

さらとなるまぬかれもいとたりなし無者乃さうなるは
ちやり乃ぶかぶうなるますさましくふさしくあらし
いるつまのひかりより粧をもとやかん海山こゝろ市れ中
のまさりなん而るしかくれとく鍛念しに大きにと
そまろくゆかれ祢ふりとなんせに瑞膳ともあまん
せに瑞雅とをくふとくおしてしまゆるの居ともしへ
しくいたくたとへは非手れ耳尾牙とうしるひいりり
祢ふりてまぬりまんとのをえたちまゆうべとさう
まんとゝゆかそに心よさうにおとろくかとし人まさ生老病
乃ゆよあふく粧さうにせに死のるはゆうせにせに
るんを又とそれさうおそるくにとうりるは湯とさうり
火とふじとし又ちん六ちくむさかりそまんいと海かし
已上意とうへ人居かくれとし海とにいとひまなるへし

此生要集其第二終

西村開板

極楽物語　初

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二

天道乃事
六居の獣相をむさぶる
聖衆来迎乐れる
蓮花初開乐乃る
分相神通乐のる
又妙境界乐乃る
快楽世退乐れ良
引接結縁乐のる
聖衆俱会乐乃る
見佛聞法乐のる
隠心佛佛乐のる
増進佛居乐れ良

一

天道乃事

それそれおこりあり一つの欲界の
世界なりその三界をそれぞれにひろくしてうんぬん
のべつう物利天王を脇
乃ちそれぞれのこかうりかう
命れをとりよなるもの
つの八部衆乃ち五衆乃ちこれ
なけば三つの八部衆乃ち
もくめうめ八つのおなじ
おとをもつけうひろ
とくをいひをざけ
もろひる八つのひそ
ろいはのくの天女とい
をかいまをもうろこく

今なうれひくうう
乃至娥とうそまの
てまわんうもうう
乃ちうく教天の衆
の死をも私ありめや
神代つ称すう鏡
を初波枝乃ちうう
う珠勝池乃ちにゆ
なしそまうせんあ
しきおこりひそ
ひをそれ命をひ
て天とれのこまめ
次のうひうう
うちうの

又我とくんや
帝釈の
帝
釈
天
の
衆
生
を
救
ふ
の
為
に
帝
釈
天
の
御
車
を
引
き
給
ふ
と
云
ふ
阿
修
羅
の
事
な
り
三
面
六
臂
の
像
多
し
雑
阿
含
経
の
中
に
あ
り
と
ひ
ろ
く
知
ら
れ
た
る
話
な
り
帝
釈
と
阿
修
羅
と
の
戦
ひ
の
事
は
仏
教
の
書
物
に
は
屢
々
見
え
た
る
所
な
り
須
弥
山
波
旬
海
の
あ
ら
ゆ
る
も
の
の
こ
と
ご
と
く
を
ひ
ろ
く
知
ら
れ
た
る
も
の
な
り
と
ふ
ぐ
こ
ろ
も

うしとせきしく誰も志りぬへし此まハ西法念種よ
も天上よりさるもなんとしけり時大くなうと生れぢ
うくの底若とくらふまハ此くらしこれにして十六か一
つよりちごくの若ハかろさなり又大佐乃天人生り
まハなもの天女なんぞくハ此天人とふりもてく大佐に
志さうしへあるひぬとくあるに天人乃ふよ志さうハさう若
とハ京中とかり出しけぬよすまねと世あてなりこゝか
天の歌天にもみなとくくくどんまこ又上界乃二天にハ
かくれ志かハなけまこ其天上とも志りそけるそのくるし見
そのこけるなりし悲想天まてこもあびのごとくとまぬかれど
志るとれハ天上のたのしこもしらしに又よしなし古原
乃そのうちいつまうとろうなるもやたく称りしさハ西
方の不退乃うてかなりへし

二

起して古原の獣相をむすぶる
つらく起して獣相をくがんとるに一遍ひらへよくるあり

ふけりすさむハからに空山あかせ来りてのうまさりなん
不なし志るにさんよくあい称ん乃くせこのうこうくふ
とおかひふくく天歌に慕して常なれと考ことにひ楽
にあらぬとにしふの癰とあらひ睫と歪りとれなん
そいとハさんやいさんや又かともなく刀山火湯さらに
誰ら智あるこの此身とあいしたりとせんや此まハ西法
念種にも智ハ常にうまひといさく獄中の因りにおさり
悪者ハつひに飲にして獄し光竜天乃としといへり海
ことに此志やだせるいハ獄中の安宮格示ハ中国なりい
それ志やそのおくかといひのれく格示乃平西へかへ
しとへ寛横種乃偈にいさく志四くの悪業を流くりて
賊抱とりとめて妻子とやういくしてよろこひなりむと
いへ其命とりぬる時くるしこ身にせまれ其妻子をくふ
ことなしいさんや三途のおそろしきかまてハさいちぬん
乃そのとかんとる車往寛もやうて人の抱とすし三途の

といへり一劫さへ志るなれハいはんや無量劫をや釈にいま
だ居然志田せうるゆへにいうつくに無量劫をへさりけり
今世も法とめ浴せしハ分らい又志るなるへし無量生死の
うちにもさまなれ人身をうけかたしたとひ人身をうけ
ても諸根をかしかたしたとひ諸根をうしても仏教に
あひかたしたとひ仏教にあふても信心をおこしかたさ
まれ人種にいまく人身に生をうるものハつめ乃こ人のつち乃
とく三途におつるものハ十分のつち乃ことし法苑にいい
まく無量世数劫にも法をきくまつ又此法をきく
たに人にかたしかたしとへ志るに今こ無く人身をうけあひ
かたし仏教にあひぬまハ若海をもなれく浄土にはう
志へうせんものたく今生にまこさあるにはれらかしらにあれ
霜雪をいうこそ信蔵に心をもめ一生ハ法にれた希有
いつきに法ゐに白日のもとをさりてひとりくらうせんのそこ
に入るハ多百踈縦形乃銅焼猛火の中におちて天にまよが

まり地をたくといふた仏の志きかあらんや称りけれ
りろくの行者ハ世ゆく志んなれ心をおこしすこやかに
志田ゆるれ居に志るこうふへしたかうの山に入くむなしく
かつるものなれ　ある人にふくいまくいつまの和をとき何
志んなれ心をおこしきへさや　志へていまくりしひろく説
ぜんと志へ方乃所説のことく古居のぬんハ云浄　若鶴
なりあるひハ又龍樹なきの猛陸迦まにもとめまふ偈
まいまくしは身ハ不浄九孔よりなれく汚濁のさハまかる
ゆむるものなれうとしうもの皮あかひかて清浄ま加
さり於し錦繍瓔珞をかりてよそほひかさりあらく
の智ある人ハいかりたふ志るのを知くる一歌をもつ
たとへハ疥あるものにより光なまちうけハもしめハ
ろうけまた後にハ黄をまりにあいらくのおとまことくしは
めハこのし光たつねまハうまへ多し身の実相ハ皆言
なるとと志るものハ元実我をくらんとうへ此説を志田